

編集後記

編集長(ダン シロウ)

執筆者への締切お知らせに、「今度、55号！」と書いた。欽ちゃんはお爺さんになったが、あの頃のコント55号は本当に面白かった。大活躍は1970年代だからもう五十年前の事なのか。当時を知らない人の方が多くなったのかな。長く活躍しているから、各世代が知っている時期で欽ちゃんはずいぶん異なるのだろう。

マガジンは創刊14年目、人間ならやっと中二。まだまだガキで生意気な盛りだ。あの頃、自分の高齢期なんて想像したこともなかったが、それで不都合はなかった。将来の事なんて、中二の頭で考えてもたいした意味はない。それでもちゃんと歳はとれる。若い頃に何を考えたり、やったりしていたかが重要だなんて多分、通俗的な慣用句だ。いつでも大事なのは今、そして明日何をするかだ。それは76歳になっても同じで、断捨離や終活の話をしている人の未来はそれなのだろう。

来年、新刊「グラフィック家族理解入門」の発行準備をしている私にはそれが未来だ。そして、その膨大な原稿をUSBで保管していたのがトラブっているのが今だ。更に2025年には十数年前、「10巻まで続けよう！」と団遊が言ったシリーズ「木陰の物語」のいよいよ第10巻を出したいと思っている。

最近の執筆者短信には出版の話題が結構多い。連載を持つことが、そういう機会を呼び寄せる。連載専門マガジンを続けることで、皆さんの原稿が溜まってゆき、形になるに違いないと考えていた。それが叶っているのだから果報者の編集長である。皆さんありがとう。

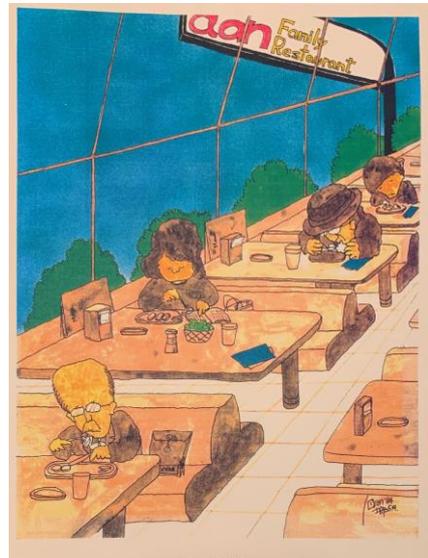
マガジンを通して未来に向けて、この世界に新しい中身を少しでも付け加えていきたいと思う日々だ。

編集員(チバ アキオ)

ファミレスに平日18時に行ったら、満席だった。平日のピークは19時頃から20時頃かと思っていた。仕事終わりの客が来るイメージである。多分、その感覚はある時までは、もしくはある地域ではあっているはずである。そこで、フロアを見るとみごとにシルバー世代ばかり。待っている人も同様である。そして、働いている人もベテラン世代。ゆっくりと着実に接客をしていた。

18時が過ぎてくると高校帰りのアルバイトさんも複数参戦。お店には「シニア割引」が大きく告知されていた。65歳以上対象で3%引き、来店スタンプが10個たまると500円引き、20個たまると1000円引き。なるほど、こういう戦略で埋まっていたのだ。

調べてみると、軒並み大手のファミレスがシニア割引を展開している。和食系に限った話でもない。ファミレスは若者のたまり場のイメージが昔はあった。人口の年齢構成比が変わるとこうした変化もあるだろう。この話題をマガジン編集会議ですると、高齢者の方がお金を持っていて、若い人は気軽に外食ができないという実態もあるだろうと編集長からご指摘をいただいた。



そもそも対人援助学の「人」は変化するのである。人が変われば社会も変わり、サービスも変わる。当然、ヒューマンサービス側の変化も必要である。

マガジンの執筆のテーマを見ると、そうした変化も読み取れる。

オーストラリアに行くと若い世代がとても多い。人口構成も見て日本とほぼ逆。若い世代が多い国では児童サービスが課題となり、高齢者が多い国では高齢者サービスが課題となる。注目を浴びれば、刷新も進む。自然なことだろう。しかし、どんな状況でも若い世代への注目は重要である。未来を作る、将来を作るという価値はいつの時代でも必要である。となると、意識的に目を向ける必要がある領域も対人援助領域にはあるともいえるか。そうした意味での対人援助学会の使命も含まれているのではないかと考えた。

編集員(オオタニ タカシ)

マガジン 55 号の編集作業を行いながら、ある意味自然なことであるが、先日の広島大会のことが短信や連載本編で多く触れられていることに気づき、嬉しくなった。本当に学ぶところが多く、さらにこれまで誌面でしか知らなかった執筆者の方々と現地で直接お目に書かれたことは本当に幸いなことで、このつながりがまた来年の大会にもよい影響をもたらしてくれると予感させてくれた。改めて、直接には初対面であっても、「マガジン」を通して既に出会っていることが、とても大きな意味をもっていることに気づくことができた。

編集会議の中での話題の一つに「多様性」という言葉があった。単なる道徳観としての「多様性の尊重」は表面的であり、弱く、欺瞞的でさえある。大会中、参加者の方が「多様性って、もっとぐちゃぐちゃでドロドロしたものなんです」と言っておられたことが思い出された。互いに異質であり、時に反発し合いさえするものが、それでも一定の枠組の中で互いに影響を与え合いながら共存する。それを実質的な多様性と考えるのであれば、少なくともこのマガジンは相当の多様性を内包することができているように思う。どちらが正しいかを競って争うことばかりの現代において、ここに少しの希望を感じている。

対人援助学マガジン

通巻55号

第14巻 第3号

2023年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第56号は2024年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年2月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

我が家の次男は、ちゃんとやりたい傾向の強い子だった。就学前の一年だけ、幼稚園代わりに住居近くの保育園に通った時。

園児達が楽しそうにする体操もお遊戯も初めてのことばかり。作法も何も知らないままの教室で、動かなくなってしまったらしい。じっと見つめて止まったままの日々。そしてある日突然、完璧にやり出したのだと聞いた。

そういう次男の傾向って、40数年後の今も、あちこちに匂う。

2023/12/15